

『不来子先生』再演 On Noh: *Blyth-Sensei*

平野 哲
HIRANO Tetsu

Abstract: New Noh play, *Blyth-Sensei*, was successfully performed on Nov. 18th, 2020 at the National Noh Theater in Tokyo despite the current difficult situation. This play was recreated by Professor MUNAKATA from his favorably premiered *Men Who Would Not Fight: Henry Thoreau and R.H. Blyth* (2019), adding this time several Basho's haiku to the original text.

Having introduced Haiku to the world is the biggest achievement of Professor Blyth. At the age of 18, Blyth was imprisoned in London as a conscientious objector. There, he was enlightened that one lives upon other's sacrifices, and he became a vegetarian. Later, he moved to Japan, where he was introduced to Zen and Haiku.

The frog in Basho's famous Haiku: "The old pond, / A frog jumps in, /The sound of the water." represents Basho himself. The old pond was the conservative unchanging world of haiku. That is why Basho decided to take on a journey of *Oku-no-hosomichi*. This interpretation is by Haiku master NAMEKATA Katsumi, and Noh Master TSUMURA Reijiro resonated with this interpretation and endeavored to depict this on the Noh stage through his exquisite performance.

Keywords: 創作能、『不来子先生』、宗片邦義、津村禮次郎、行方克巳、俳句、芭蕉、中村明一、『奥の細道』、ヘンリー・ソロー。new Noh play, *Blyth-Sensei*, MUNAKATA Kuniyoshi, TSUMURA Reijoro, NAMEKATA Katsumi, haiku, Basho, *Oku-no-hosomichi*, Henry Thoreau.

「不来子先生」再演、誠におめでとうございます。慶賀に絶えません。令和二年十一月十八日、国立能楽堂で、創作能「不来子先生」が四月十八日の振替として、無事再演された。今回の再演は、昨年三月の初演をうけてより不来子先生の御遺志が明確に皆様に伝わる様に衆知が結集されている。

創作者宗片邦義氏は、R.H. Blyth（不来子）先生の最期の授業を受けた愛弟子であり、先生の業績お気持ちを『ブライス先生、ありがとう』で2010年に著され、またこの新作能の詞章（台本）をつくられた。それに、能公演に必要な節付等を津村禮次郎師に依頼され、昨年初演を迎えた。

初演をさらに磨き上げた今回の公演の見事さは、現代日本語、英語、に加え俳句の朗詠（披講）を能という、伝統の型に収めることにより、開花させたことにある。厳密な様式と型がある事により、時空を超えた思いが結実し、昇華しえたものと確信する。

不来子先生の業績は多々ある。是非皆様には上田（宗片）邦義氏の著書『ブライス先生、ありがとう』（三五館）をご一読頂きたい。その最大の業績、歴史に残る業績は、松尾芭蕉を世界最大の自然詩人として、『HAIKU』四巻を著し、世界に俳句を衆知したことである。今回行方克巳氏が俳句助言として、芭蕉の句を数句お勧めし、津村師が、最適な場所に据えられ、ここに公演の柱が定まった。

舞台では、囃子は、笛、小鼓、大鼓に格調高い調べに加え、特別出演の尺八中村明一氏は、幽玄の世界をつくり、やがて後シテの不来子の霊が登場。第一声は、「荒海や 佐渡に横たふ 天の川」

「われ不来子なれども、時を隔てて今ここにきたりたり。」

来日したハーディング教授と不来子の霊の語り合いの後、『奥の細道』の冒頭、橋掛かりからの尺八の音に合わせて「旅に病んで 夢は枯野を かけ廻る」と詠じ、学生への最後の教えは「人生に意味あるは、その苦悩が、絶望的なるときのみと。」

尺八の音と共に、「古池や ♪ 蛙 ♪ 飛び込む ♪ 水の音 ♪」
そして強く 「古池とは何ぞや？」 ♪ 「蛙とは何者ぞ？」 ♪

不来子先生が敬愛するアメリカの平和主義者、ヘンリー・ソローへの想いを込めて、「ソローが書きたる一言一句。すべてユーモアに満ち溢れ」地謡の「その生涯を一編の。その生涯を一編の。詩に創らんと生き抜きて。」{共にこれを言葉もて。書き記さんは難かりし。}の語とともに幕へと消え去ってゆく。以上が公演舞台の私なりの鑑賞である。

此処で幾つかを点を付け加えたいと思う。

「古池や ♪ 蛙 ♪ 飛び込む ♪ 水の音 ♪」
そして強く 「古池とは何ぞや？」 ♪ 「蛙とは何者ぞ？」 ♪

この蛙は、芭蕉その人。古池は、旧来然とした俳諧の世界。芭蕉は、決然として、奥の細道の旅に出た。この行方克巳氏の解釈に津村師が、共鳴されたところから今回の再演の柱が決まったと拝察する。

不来子先生は、十八歳で、敵兵といえども人は殺せぬと、徴兵を忌避し刑務所へ。そこで、生きるとは他の命を頂く事と悟り、菜食主義者に。臆て、禪に出会い、鈴木大拙師に帰依。ま

さに、十八歳で「古池や ♪ 蛙 ♪ 飛び込む ♪ 水の音 ♪」を体現された。それゆえに、芭蕉を知り、世界に俳句を衆知させるべく『HAIKU』四巻を著されたのだと確信したのである。

私はかつて湾岸戦争時を含め、中東のパハレーンに六年間駐在した。その際の楽しみ、喜びは、太陽が西に沈む頃、砂漠にテントを張り、アラブの友と、アラビアコーヒーを飲み、詩の朗読を聞きながらひと時を過ごすことであつた。

彼らにこの世の中で一番尊敬できる人はと聞いたことがある。答えは「詩人である。」と。とてもこころに残る言葉である。俳句は世界で一番短い三行詩。文字の無い時から私たちは、耳で聞く言葉を大切にしてきた。自然を命を大切にしてきた。

今回の公演は新コロナという見えない脅威の中、大変なご苦労の末、席も半分以下で開演された。関係者の皆様に大いに感謝するとともに、私はいささか能と俳句を嗜む者として、不来子先生の御遺志、宗片先生の熱き想い、津村師の洞察力と表現の見事さ、行方先生の深い解釈を、心に刻み何をなすべきかを思慮し始めたところである。

追記

公演をご覧になれなかつた皆様のために、U-TUBE にしかるべき時期に公演内容の動画が UP されるとのこと。是非ご鑑賞いただければ幸甚です。

令和二年十一月三十日 記